

[研究ノート]

英語語彙における二重語の意味の差異化

ギリシア語起源(3)

安 達 一 美

英語は、いろいろな言語から柔軟に語を受け入れて、大変豊かな語彙を持っています。外国語としての英語を学ぶとき、その語彙の豊かさに圧倒されてしまいます。英語を習得するためには、語彙数を増やす努力は大切なことです。しかし、それぞれの語をより深く理解することも同じく大切なことです。

新しく作られたり、外国語から取り入れられたりした語が、その言語に定着するには社会的認知と受容が必要です。その意味で、語は社会的な産物ともいえます。どのような時期に、どのような文化と接触して、どのような新しい事物や概念が英語圏に入ってきたか、語はその証を私たちに示してくれます。このような文化的・歴史的背景の知識が英語語彙の理解を深めることとなります。

このシリーズでは、同じ語源の語が異なる時期に異なる経路で英語に借入されたために、異なる形態や意味となった二重語に焦点をあてて、それぞれの意味の差異化の過程を調べることによって、英語語彙がどのように発達をしていったかを検証します。第3回目の今回はギリシア語起源の二重語で、キリスト教と病気に関係する語の意味変化をみていきます。

1. church (教会) vs. kirk (北部イングランド・スコットランドの 教会)

この二重語は、ギリシア語 *κυριακόν δωμα* 'the Lord's house' (主の家) の *κυριακόν* が語源である。このギリシア語は、中世ギリシア語において *κύριος* (Lord: 主) から派生した形容詞形で 'belonging to the Lord (Christ)' を意味する。*κύριος* は、世俗的な意味では「主人」を意味するが、ユダヤ教・キリスト教においては「主」・「神」を表す語として頻繁に用いられ、『七十人訳聖書』(Septuaginta) においてヤハウェを表す語として、そして、『新約聖書』ではキリストを意味した。それは、神とその礼拝者との関係を主人と従者の関係とみなす東方的な考え方からきており、崇拜の対

象とされた神的存在者や地上の神とみなされた当方諸国の君主やローマ皇帝にも用いられた。このギリシア語κύριοςは、また、ギリシア人がペルシア皇帝をさす語として用いたκῆρος (最高権力) から派生しており、紀元前6世紀にメソポタミアから小アジアに及ぶ大帝国を築いて、バビロニアに捕囚されていたユダヤ人を解放したキュロス大王 (Kyros II 在位559-530BC) に由来している。

churchは、ギリシア語κῆριακόνから古英語*circe*, *cyrice* 'public place of worship' として直接借入され、中英語*chirche*, *churche*を経てchurchとなる。churchの語頭音[t]は、古英語期には[ky]であったが後続音[r]の影響による口蓋化 (palatalization) によって生じたものがある。churchは古英語期から「祈りの場」のみならず、組織としての「キリスト教会」をも意味していた。また、地名の要素として用いられ、9世紀にはChristchurchやWhitchurchの地名が文献に登場している。カナダの東部Labradorの南東部から大西洋に流れる川The Churchillや、イギリスの随筆家Charles Lamb (1775-1843) が晩年住んでいた建物があるLondonのChurch Streetのように、川や通りの名前にも見られる。また、人名の要素としても用いられ、1940-45年と1951-55年にイギリス首相となったSir Winston Churchill (1873-1965) や軍人で文筆家のThomas Churchyard (1520-1604) の姓にも見出せる。

一方、**kirk**は古英語よりイングランド北部の古北欧語*kirkja*を經由して、イングランド北部およびスコットランドに定着した。この語は「教会」を意味し、the Kirkは「スコットランド長老教会」(Kirk of Scotland) を指す。古英語期から中英語期おける口蓋化で[t]となった語頭音、語尾音が、北部方言やスコットランド方言では[k]を保持した。

このkirkもchurchと同様に、地名や人名の要素にもなっている。kirktown, kirktonは「教区教会がある町(村)」「寺領地 (glebe)」を意味し、ことに北部イングランドやスコットランドにはKirkという地名が多い。地名の要素として用いられた例として、イングランド北西部Merseyside州のKirkby, スコットランド北部にあるOrkney諸島の中心地であるKirkwall, カナダ南部Ontario州東部の町でかつてカナダの金産出の中心地であったKirkland Lake や、アメリカのWashington州中西部の都市Kirklandなどがある。

また人名として、個人名にも姓にも用いられており、北部イングランドや

スコットランドに多い名前である。アメリカの映画俳優として有名なKirk Douglas (1916-) の名前として、日本人にはなじみがある。ただし、彼はユダヤ系ロシア人の子でニューヨーク生まれである。また、姓としては、ニュージーランドの首相にもなった政治家Norman Eric Kirk (1923-74) やアメリカの政治学者で1953-68年にColumbia大学の学長となったGrayson Louis Kirk (1903-97)、スコットランドの小説家Robert Kirk (1961?-92) などがいる。また、Kirke, Kirkland, Kirkpatrickなどの姓もKirkからきている。

英語churchはギリシア語κῆριακόνからの直接借入であり、このギリシア語はラテン語に借入されていない。ラテン語では「教会」を意味する語としてギリシア語の ἐκκλησιᾶ (民会) が用いられ、ラテン語ecclesiaを経て英語に借入されecclesiaとなった。このギリシア語は『七十人訳聖書』において 'assembly' を意味するヘブライ語qāhālの訳語として用いられた。ギリシア語κῆριακόνがゲルマン語に直接借入された要因は定かではない。ニカイア公会議で追求されたアリウス派がローマ帝国外のゲルマン民族に拡がっていたのを要因として考えることもできるが、ゴート語訳聖書にはἐκκλησιᾶからの借入であるaikkesjoが用いられているので根拠としては十分とはいえない。また、信仰とはかかわりのなく、略奪の対象としての建物の名称として借入した可能性も残る。

2. crown (王冠) vs. corona (コロナ)

この二重語はギリシア語の形容詞κορῳνός (曲がった) から派生した名詞κορῳνή (カラスの類; カラスの嘴のように曲がったもの ドアの把手、弓筈、犁の柄の先端部分など) が語源である。この語がラテン語corōnaとして借入され「花輪、壁飾り、聴衆、会衆、王冠」の意味に使われた。英語はこのラテン語から古英語期にcorona (キリストの 茨の冠) として借入する。

OEDはcrownの初出を7世紀末成立の『リンディスファーン福音書』(Lindisfarne Gospels) の「ヨハネの福音書」19章第2節のCoronam de spinis (Christ's crown of thorns) としている。『欽定訳聖書』(The Authorized Version) など英語訳の『新約聖書』にcrownが使われているのは24箇所ある。

しかし、コイネの『新約聖書』では、こられの箇所は*κορώνη*ではなく、*στέφανον*（花輪）が用いられている。しかし、このギリシア語はラテン語には入らず、その派生語の*stephanūsa*（花冠を編む女）、植物名*stephanos*（spurge laurel：ジンチョウゲ科ジンチョウゲ属の常緑低木）や*stephanopōlis*（花冠を売る人）などが取り入れられている。英語には「冠」「光輪」を意味する結合形*stephan[o]-*や*stephanos*（栄光のしるしの冠）として入っている。ギリシア語*στέφανον*を、紀元4世紀初のラテン語訳聖書『ヴルガタ』（*The Vulgate*）においてラテン語に翻訳されるとき、ギリシア語*κορώνη*から借入した*corōna*が使われ、ラテン語聖書をもとに翻訳された英語の聖書ではこのラテン語からの借入語である*crown*が用いられた。

*στέφανον*は、古代ギリシアの競技大会で勝者に送られた月桂樹やナツメヤシで作られた「勝利の冠」である。この語から*Stephanus*という名前が生まれ、英語の名前Stephenの語源となっている。中世キリスト教圏では、使徒によって選ばれた助祭の一人で原始キリスト教会最初の殉教者であるSaint Stephenにあやかる名前として、人気のあった名前でも、ヨーロッパ各地にこの名前が広がった。各国の王の名前としてもハンガリーの聖王イシュトヴァーン（Istvan 在位997–1038）やノルマン王朝4代目の王スティーヴン（Stephen 在位1135–54）などがある。また、歴代のローマ教皇にもステファヌス1世から10世までこの名前の10人の教皇がでており、ことにカロリング朝の創始者小ピピン（Pepin the Short 714?–68）の援助によって教皇領の基礎を築いたStephanus II（在位752–57）や、敬虔王ルイ1世（Louis I 在位814–40）を西ローマ帝国の皇帝として戴冠して教皇権を確立してフランク人との連携を強化したStephanus IV（在位816–17）はローマ教皇の地位を強固なものにした教皇として名を残した。

*crown*は、中英語期に古北部フランス語*corune*, *curune*からアングロ・フランス語*coroune*を経て再度借入され、12世紀には語中音消失（syncope）により*crune*の綴りへ変化し、17世紀には現在の*crown*へと変化する。現代フランス語*couronne*は、英語の*crown*と*corona*の両義を持ち合わせ、「花冠」「王冠」「太陽の光環コロナ」などを意味している。

英語*crown*は、11世紀後半には権力の象徴として君主がかぶる「王冠」、12世紀には競技の勝者に送られる「リース」や殉教者などの「後光」や「光

輪」の意味を加える。また、14世紀には、比喩的な意味の広がり、君主国の王冠が象徴となっている「王権」「主権」「権威」が加わり、Crown Colony（英国の直轄植民地）、crown agent（直轄植民地の総督）や、イギリス王室許可の証である王冠標がつけられた「Derby産の磁器」を意味するCrown Derbyなどの用語が生まれている。そして、王冠をかぶる人という意味で、「帝王、国王、君主」の意味が16世紀後半に加わっている。

crownは、また、15世紀前半に、王冠が図柄の一部として刻印された硬貨を指し示すようになる。現在では使用されていないが、かつての5シリング銀貨をcrownと呼んでいる。世界のコインの分類にcrown-sized coinがあり、British Crown（イギリスのクラウン硬貨）のサイズである直径37～40ミリが基準となっている。世界で最初にcrown-sized coinが発行されたのは、1484年ボヘミア（Bohemia）のJoachimsthal（現在のチェコ共和国のドイツ国境に近い都市）で、この硬貨はJoachimstalerとかThalersと呼ばれた。この語がアメリカの貨幣単位であるdollarの語源となっている。英語には16世紀中ごろドイツ銀貨Talerの英語名称として借入され、スペインの貨幣pesoの英語名称としても用いられた。アメリカの貨幣単位としては18世紀後半に取り入れられている。

crown硬貨は王の在位の間に発行される最も大きいサイズの銀貨であるため、コイン収集家に人気がある。最初にcrownの名前が用いられた硬貨は、フランスのヴァロア家（Valois）最初の王で在位中に百年戦争が始まったフィリップ6世（Philip VI：在位1328～50）によって1339年に発行された金貨の*denier à couronne*（240分の1リーブル）で、硬貨の表に王冠の図柄が刻印されていた。同じくヴァロア家で狂気王と称されたシャルル6世（Charles VI：在位1380～1422）の在位期間の1384年に、盾の上に王冠の載った図柄の金貨*écu à la couronne*が発行され、特に15世紀から18世紀にかけてこの*écu*硬貨の英語名称としてcrownが一般的に使われた。

イギリスで最初に発行されたcrownは、ヘンリー8世（Henry VIII：在位1509～47）の在位期間の1544年に出された5シリングの価値をもつ金貨である。しかし、ヘンリー8世はその発行以前の1526年に裏面にバラの図柄をもつ2種のCrown of the Roseと呼ばれる金貨を発行している。最初のものは*écu à la couronne*を模したものであったが人気がなく、すぐにTudor double rose

をデザインした2番目を出した。金貨のcrownは1662年のチャールズ2世（Charles II：在位1660–85）が発行したのを最後にそれ以降は出されていない。最初の銀貨のcrownは1551年エドワード6世（Edward VI：在位1547–53）の治世に出された。ヴィクトリア女王（Alexandrina Victoria：在位1837–1901）の治世では6種のcrownが発行されている。そして、現イギリス女王のエリザベス女王（Elizabeth II：在位1952–）のもとでは、1953年の即位記念のcrownから、2004年4月8日のフランスとの和親協商（Entente Cordial）の百周年を記念した5ポンドcrownまで、21種類が発行されている。また、北欧の通貨kroneもやはり王冠を刻印した硬貨である。

crownの二重語coronaは、16世紀中ごろに「古代建築のコーニス中層部である コロナ」という意味の建築用語として、ラテン語corōnaから直接借入された。17世紀中ごろには「太陽や月の周りに見られる 光輪」が加わる。そして18世紀には、解剖学用語や植物学用語で冠の形に似ている部位の名称として用いられるようになり、「齒冠」「体冠」や「花冠の中の 副花冠」などを意味するようになる。19世紀には皆既日食において観察される「コロナ」の意味が加わった。corona lucisは建築用語で教会から広がった円形のシャンデリアであり、文字通りの意味はcrown of lightである。このラテン語corōnaから取り入れて派生した英語の語に、coronet（王子・貴族などの 小冠）、corolla（花冠）、coroner（検視官）、解剖学用語のcoronary（冠動脈の）などがある。

3. scandal（醜聞）vs. slander（中傷）

ギリシア語σκάνδαλον（敵のために仕掛けられた 罠）は、二重語scandal とslanderの語源で、特に『新約聖書』では「つまずきの石、罪の誘惑」というように比喩的に用いられている語である。この語は、インド・ヨーロッパ祖語*skand-（飛び上がる）に由来する。ラテン語scandere（上る）もこの祖語に由来しており、英語ascend（のぼる）、scandent（植物が よじ登る性質の）、scansorial（動物が 木によじ登る性質の）、transcend（経験・理性などの限界を 越える）、descend（おりる）やscan（ざっと目を通す）の源となっている。σκάνδαλονは『七十人訳聖書』において、ヘブライ語próskomma（罠、罠の餌）の訳語として用いられ、比喩的用法で「(人が)

つまずくもの」を意味した。このギリシア語が後期ラテン語に *scandalum* として「つまずきの原因」の意味で入る。そして、その後、「罪の誘惑」のほかに、「衝突、不和」「立腹」「不品行」の意味を付け加えた。このラテン語から、古フランス語は11世紀中ごろ宗教的な「つまずき」の意味を持つ語 *eschandle* として取り入れる。

英語 *scandale* は、古北部フランス語 *escandle* を経由して、13世紀前半に宗教的意味の *scandle*, *schandle* (信仰を持つ人の行為によって引きおこされる信仰のつまずきとなるもの) で借入されるが廃義となり、16世紀にラテン語形に修正されたフランス語 *scandale* を通して *scandal* が「不信仰の誘因」「道徳的墮落」の意味で再度借入される。

σκάνδαλον は、『新約聖書』において「罪 不信仰・背教・墮落 への誘因となるもの または人」の意で、「マタイによる福音」の第13章第14節 (*σκάνδαλα*) と第16章第23節 (*σκάνδαλον*) 及び第18章第7節 (*σκάνδαλων*) で、また、「ローマ人への手紙」第16章第17節 (*σκάνδαλα*) など で用いられている。ラテン語訳の『ヴルガタ』において、これらの箇所のうち *offendicula* (つまずき の石、障害) と訳された「ローマ人への手紙」を除いて、他の箇所はすべてギリシア語 *σκάνδαλον* の意味を保持しつつラテン語に入った *scandalum* 及びその格変化形が用いられている。そして、英語訳聖書では、*sclanndris* や *scandals* と訳した Rheims 訳 (1582年) と Wyclif 訳 (1380年) を除いて、Tyndal 訳 (1534年)、Cranmer 訳 (1539年)、Geneva 訳 (1557年)、欽定訳 (1611年) では *offences/offenses* が用いられた。ただし、上記「ローマ人への手紙」の箇所は、ラテン語訳聖書『ヴルガタ』と同様に Rheims 訳と Wyclif 訳においても *offences/offenses* と訳されている。

「ガラティア人への手紙」第5章第11節における *σκάνδαλον τοῦ σταυροῦ* (*the scandal of the cross*) は、『旧約聖書』の「イザヤの書」第8章第14節におけるイスラエルの「さまたげの石、つまずきの石」を下敷きにしており、イエスの弟子たちがメシアと信じていたイエスが何の抵抗もせずに死んでいくことを見たことによる宗教上のつまずきを表している。この箇所の翻訳を比較してみるとつぎのようになる。

ἀρα κατήρηται τὸ σκάνδαλον τοῦ σταυροῦ

(Then the offense of the Cross has passed away. Literal translation)

<i>ergo evacuatum est <u>scandalum cruce</u></i>	ラテン語訳
thane <u>the sclundre of the cros</u> ; is voided	Wyclif訳
For then had <u>the offence which the crosse geveth</u> ceased.	Tyndale訳
Then is <u>the slaunder of the crosse</u> ceased.	Cranmer訳
Then <u>the slander of the crosse</u> ceased.	Geneva訳
then is <u>the scandal of the crosse</u> euacuated.	Rheims訳
then is <u>the offence of the crosse</u> ceased	欽定訳

(下線部は筆者による)

そして、1611年の欽定訳でthe offence of the cross と訳されて以降、scandal という語は『新約聖書』の英語訳から消えていった。

宗教的意味合いをもたない「評判を失うこと、評判を傷つけるような噂・ことば」や、「ひどく信用を傷つける状況・出来事」「地位・階級・国をひどく傷つける行いをする人」、「中傷・悪意のあるゴシップ」は、16世紀の終わりごろに加わる。また、17世紀には、「不名誉な非難、根拠のない汚名」や「道徳的な罪」が加わる。しかし、17世紀に発達した前者の意味は、やがてslander が引継ぎ、19世紀後半にはscandalの語義からは消えていく。

政治家が関係する犯罪・不道徳行為で真実かどうかは別問題として公になった事件をpolitical scandalという。まさに、政治家としての政治生命が危ぶまれるような「つまずき」の事件である。アメリカでこのような事件の名前にscandalが使われたのは、1790年代に生じたYazoo Land Scandalで、これはYazoo Land Fraudとも呼ばれ、1795年から1803年にかけて、ジョージア州歴代知事（George Walton, Edward Telfair, George Mathews, Jared Irwin）や州議会が、考えられないような低価格で広大な土地を内部関係者に売るというインサイダー取引を行った事件である。また、われわれの記憶に新しいものとして、現役大統領ニクソンが関与したWatergate scandal（1972–1973）やクリントン大統領がアーカンソー州知事時代に土地取引に関与していたと疑惑をもたれたWhitewater scandal（1994–2000）などがある。なお、Watergate scandalは、-gateという連結形を生み出し、固有名詞や普通名詞につけて疑獄事件を表す語を作り出している。例えば、レーガン政権下でおこったIrangateや、クリントン政権下でのWhitewatergate、クリントン大統領夫人ヒラリーが牧牛（cattle）へ不正な投資をしたと疑われた

Cattlegate、 ホワイトハウスの旅行担当者の人事に関してクリントン大統領に向けられた疑惑Travelgate、 民主党全国委員会へのインドネシア企業家による巨額な献金問題のIndonesiagateなどがある。

一方のslanderは、古フランス語escandleの異形esclandreから、アングロ・フランス語esclaundreを経て13世紀の終わりごろ「中傷、ある人に関して特に悪意で名誉を傷つけようと嘘の発言やそれを広めること」「不名誉、特に不道德行為による悪評判」の意味で英語に入った。しかし、後者の意味はやがてscandalが担うことになり、17世紀ごろまでには廃義となっている。また、14世紀中ごろから16世紀にかけて、語源の「道徳的つまずきの原因」という意味をもったが、scandalやoffenceがその意味を引き継ぐことになる。slanderは法律用語として用いられ口頭による名誉毀損「口頭誹毀^{ひき}」を意味し、「(人)を口頭誹毀で告発する」はto accuse (someone) of slanderと表現する。slander of title (権利の誹毀) は、原告の財産権について、被告が第三者に悪意ある虚偽の発言をすることによって損害を与えた場合のことをいう。

4. cholera (胆汁) vs. cholera (コレラ)

伝染性の強い胃腸疾患choleraの語源はギリシア語χολή (胆汁、憤怒) から派生したχολέραで、他の胆汁疾患も含め、疾患名である。そして、choleraと二重語を形成している。ギリシア語の意味を保持してラテン語にcholeraとして取り入れられたが、3～5世紀にはχολήと同じ意味で用いられ、古代ギリシアの生理学の学説に遡る考え方で、中世の医学において人間の体や精神を支配すると考えられていた四体液 (humor) の一つである胆汁の名称となる。ちなみに他の三体液とはsanguis (血液)、melancholia (黒胆汁)、phlegma (粘液) で、それぞれの四体液が過剰になるとcholeric (怒りっぽい)、sanguine (血色のよい、快活な)、melancholy (鬱病の、憂鬱な)、phlegmatic (粘液質の、冷淡な、沈着な) となると考えられた。そして、これらのバランスが崩れ、いずれかの体液が過剰になった人が異常な行動に出る状態をhumorousといわれ、その異常性が人の笑いを呼び起こすことから「こっけいな、おどけた、おかしい」という意味に変わっていった。

ラテン語choleraは、ロマンス語を経て古フランス語に14世紀の終わりごろ

ろ *colre, colle, cole* (胆汁、怒り)として入るが、学識語 *colère* の影響によって現代フランス語のつづり *colère* となる。そして、16世紀中ごろには *cholere* (コレラ) をラテン語から再度借入して、フランス語においても二重語を形成している。

英語 *cholera* は14世紀の終わりごろ古フランス語より中英語 *colre, colrye, coler* (四体液の一つ 胆汁)として入る。*OED*は英語 *cholera* の初出をラテン語訳『ヴルガタ』のWyclifによる英語翻訳としており、「集会の書」第37章第30節で “*Gredynesse shall ne hen vnto colre*” (For excess of meats bringeth sickness, and surfeiting will turn into cholera. おいしい食べ物をむさぼって食べるな。食べすぎは不健康の元で、大食は、腹痛を起こす。)と訳している。しかし、この語義は17世紀初めを最後に廃義となっている。また、Chaucer の『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*)の *The Nun’s Priest’s Tale 108*では、四体液の一つで、怒りっぽさを引き起こす「胆汁」で、また同じく *126*では、「胆汁疾患」の意味で用いている。16世紀にラテン語 *cholera* が持っていた「怒り、憤怒」の語義が加わった。現在では *cholera* は古風な響きを持つ語となっているが、この語から派生した語に形容詞 *choleric* (かんしゃく持ちの、怒りっぽい) や名詞 *cholesterol* (胆汁・血液などに含まれる コレステロール) などがある。

cholera は *cholera* の異形として中英語に取り入れられ、初期においては *cholera* と同義の「胆汁」を意味していたが16世紀中ごろを最後に廃義となる。そして、胆汁性の下痢・嘔吐・胃痛を伴う疾患の病名となる。初めは *cholera morbus* (disease cholera) と呼ばれ、*cholera* (胆汁) と区別されていた。1816年から17年にかけてインドで悪性の伝染病が起こり、1830年代前半には、ヨーロッパや北アメリカに広がった。イングランドには1831年から32年に上陸した。この伝染病は、もともとインドの風土病で、胆汁が起因するものではないが、disease cholera とよく似た症状である激しい嘔吐、米のとぎ汁のような下痢、そして強い脱水症状を呈していた。初期は *Asiatic cholera* とか *Indian cholera* などと呼ばれていたが、次第に短縮されて *cholera* と呼ばれるようになり現在に至っている。ちなみに日本では、1822年にはじめてコレラの流行が記録されている。

5. noise (騒音) vs. nausea (吐き気)

noiseとnauseaは、ギリシア語*ναύσια* (船酔い)を語源とする二重語である。このギリシア語は、*ναύς* (船)から派生した語で、英語*naval* (海軍の、船の)や*nautical* (航海の、海事の)の語源となっている。*ναύσια*がラテン語に入って*nausea*となり、ギリシア語の意味を保持した。その後、「船酔いに伴う激しい嘔吐などの胃の症状」や「船酔いに伴う騒がしさ」の意味が加わった。古フランス語は、11世紀の終わりごろ*noise*を後者の意味でこのラテン語から取り入れ、「騒がしさ、喧嘩」へと意味を発展させた。現代フランス語では、*noise*のこの意味は古義となり、*chercher noise á ...* (～に喧嘩をうる)の成句のみで使われており、「騒がしさ」はイタリア語から借入した*bruire*を使用し、「吐き気」「嫌悪感」の意味では16世紀ラテン語から再借入した*nausea*が使われている。

英語は古フランス語*noise*を13世紀はじめに「大きな叫び声」の意味で取り入れる。しかし、必ずしも不快感を伴う音とは限らず、耳に心地よいメロディアスな音をも意味し、*a very pleasant and delectable noyce [noise]*などの表現があった。例えば、Guillaume de LorrisとJean de Meur作『薔薇物語』(*Le Roman de la Rose*)の翻訳で、チョーサーによって前半部が訳されたといわれている*The Romaunt of Rose*において、冬の寒さの中で押し黙っていた小鳥たちが5月になってうらかな陽気さとともに喜びに満ちてさえずりだすというくだりで、ナイチンゲールの鳴き声を表現して次のように書かれている。

Than does the nightingale hir might
To make noyse, and signen blithe. Chaucer訳

Li rossignos lores s'esforce

De chanter et de faire noise Guillaunme作

その時うぐいすは懇親の力をこめて
歌い、音をたてる

フランス語原文の*noise*をそのまま取り入れて*noyse*と訳し、「快い音楽的な音」を意味している。また、シェイクスピアも、『テンペスト』(*The Tempest*)第3幕第2場におけるCalibanの台詞で「楽の音」(*musical sound*)の意味で*noise*を用いている。

Be not afeard; the isle is full of noises

Sounds and sweet airs, that give delight and hurt not.

こわがることはねえぜ。この島はいつも物音や

歌声や音楽でいっぱいだが、楽しいだけで悪いことはなんにもしねえ。

(小田島雄志訳)

このような「心地よい音」の意味は、18世紀の終わりごろに書かれた Coleridge の『古老の船乗り』(*The Rime of the Ancient Mariner*) の第5部においても見受けられる。

It ceased; yet still the sails made on

A pleasant noise till noon

歌はやんだ。しかし帆はなおも

心地よい音を正午まで立てていた。

(上島建吉訳)

借入時の13世紀のころには、「噂話、中傷、醜聞」や「評判」「もめごと、論争、喧嘩」の意味があったが廃義となっている。20世紀に「発話」の意味が加わる。例えば、to make a noise は文字通り「大きな音をたてる」という意味であるが、現代の俗語では「無礼な音をたてる」「ゲップをする」ことである。しかし、to make noises は「無礼な音」のニュアンスが消え、考えや気持ちを「口に出して主張する」意味になり、to make encouraging noises や to make sympathetic noises の表現が可能となる。「騒音」の意味は借入時から取り入れており、借入時ごろから without noise (静かに、内密に) の表現があった。

「吐き気」「嫌悪」を意味する nausea は、今でも「船酔い」をも意味する。16世紀中ごろにラテン語 *nausea* から借入し、18世紀にはもともとの意味である「船酔い」での使用例が見られる。派生語として、医学用語の *nauseant* (悪心を起こさせる 薬) や、動詞 *nauseate* (吐き気をもようす) 形容詞 *nauseous* (むかつかせる、吐き気をもようした) が生じている。実際に吐く行為の動詞は *vomit* である。この語はラテン語 *vomitare* (吐く) から15世紀前半に借入されている。